

アッカド王朝サルゴン王碑文に言及される トゥトゥル市の所在地同定

川上 直彦

Identifying the Location of Tuttul Mentioned in the Royal Inscriptions of Sargon of Akkad

Naohiko KAWAKAMI

アッカド王朝サルゴン (Sargon) 王碑文の中にトゥトゥル (Tuttul) 市という地名が他の地名と共に言及されている。この地名の所在地をアッカド王朝時代の文献史料だけを基に考察した場合、正確な所在地を確立することはできない。また古代西アジア史という総括的な観点からこの町の所在地について考察した場合、トゥトゥル市という名がついた同音異義語の町がいくつか存在していた事が確認できる。ここで筆者は、近年ドイツ発掘隊の手によりこれらの内の一つのトゥトゥル市と同定されたシリアのテル・ビーア (Tell Bi'a) 遺跡がアッカド王朝サルゴン王碑文の中に言及されるトゥトゥル市と同一である事を定義づけ、サルゴン王碑文におけるトゥトゥル同定の歴史的な意味を考察する。

キーワード：トゥトゥル市、アッカド、サルゴン王、地理、所在地

The place name called Tuttul is mentioned along with some other toponyms in the royal inscriptions of Sargon of Akkad. When the location of this toponym is considered based only on the written sources of the Old-Akkadian period, its precise location cannot be established. Furthermore when the location of this toponym is considered in terms of the ancient West Asian history as a whole, the existence of some homonyms carrying the same place name of Tuttul can be identified. Here the author attempts to define that one of those Tuttuls, whose location has recently been identified with the ancient ruin of Tell Bi'a in Syria by the German excavation team, is to be identified with the Tuttul mentioned in the royal inscriptions of Sargon of Akkad, then considers the historical importance of this identification.

Key-words: Tuttul, Akkad, Sargon, Geography, Location

はじめに

シュメール語と古アッカド語で書かれた、2言語使用のサルゴン王碑文の中に、トゥトゥルという名の都市国家が言及されている。王碑文ではサルゴン王がそこでダガン (Dagan) 神に祈りを捧げ、その結果ダガン神は上方の国土、即ちマリ (Mari)、ヤルムティ (Iarmuti)、エブラ (Ebla)、杉の森、そして銀の山々をサルゴン王に与えたという記述がある。トゥトゥル以外の地名の所在地はメソポタミア北西地域にあると認識されているので、トゥトゥルの所在地に関しても同じ地域にあると一般的に考えられる。しかし一方でトゥトゥル市の所在地について古代西アジア史という総括的な観点から考察した場合、他にも同音異義語の都市名が存在する事が解っている。そこで本稿ではサルゴン王碑文で言及されたトゥトゥル市とはどこに位置しているのか明らかにしていく。

ティグリス川上流域東部に位置するトゥトゥル市

古バビロニア時代の書記の手によりコピーされた上述の2言語使用のサルゴン王碑文の中で、トゥトゥル市は古アッカド語で *Tu-tu-lt*^{ki} と名が表音でつづられており、また上方の国土という漠然とした地名と関連して言及されている。そしてシュメール語版の王碑文では *Dus-dus-lt*^{ki} と名がつづられている (Frayne 1993: E.2.1.1.11-12)。これら2つの記載例以外のトゥトゥルの存在を確認してみると、GAB.GAB.NI^{ki} という表意文字でつづられた地名が、フリバル (Ḫulibar) というその町の統治者の名と共にウル第3王朝時代の行政経済文書の中に頻繁に確認する事ができる。そして GAB.GAB.NI^{ki} と書かれた地名は同時に *Dus-dus-lt*^{ki} と読める (Landsberger 1924: 233, note 6; Gelb 1938: 74-5; Goetze 1953a: 115, note 4)。B. ランズバーガー (Landsberger) はウル第3王朝時代のフリバルという統治者が管轄する GAB.GAB.NI^{ki}=*Dus-dus-lt*^{ki} という地名のお

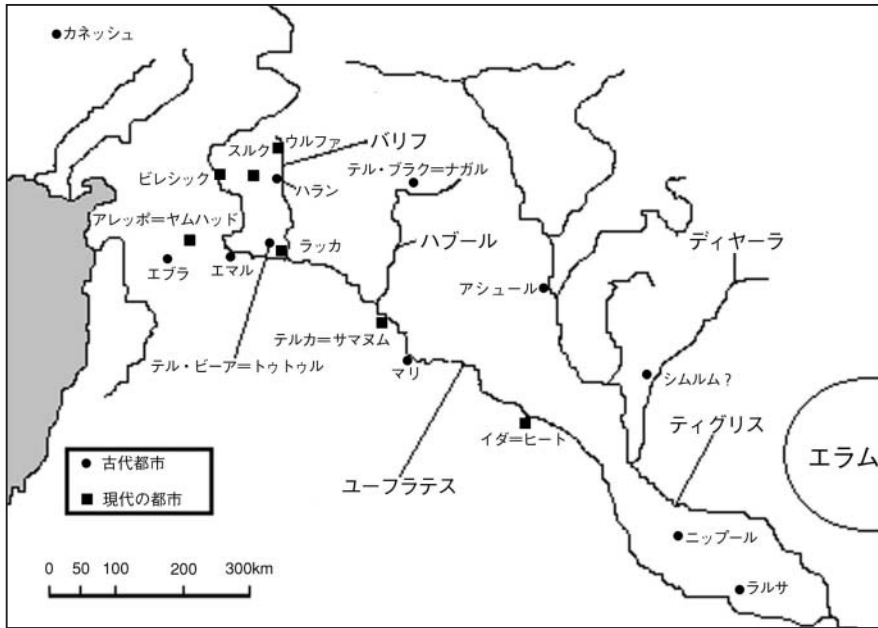


図1 関連古代都市、現代の都市地図

およその地理的所在地は、2つの理由からティグリス川上流域東部のどこかに位置するのではないかと主張している。彼はまず第1の理由として GAB.GAB.NI^{ki}=*Dus-dus-l^{ki}* の直前、そして直後に NIM (=エラム (Elam) =ティグリス川東部地域) が頻繁に羅列されている事を指摘した。また第2にアッカド時代の行政経済文書の RTC 250: 4'で *Du-du-ul^{ki}* とつづられた町の出身の人間が *Ši-mu-ru-um^{ki}* と名がつづられたティグリス川上流域東部のどこかに存在すると推測されている都市出身の人間について言及された直後に言及されている事も理由として挙げている。GAB.GAB.NI^{ki}=*Dus-dus-l^{ki}* の統治者であるフリバルとエラム地域の町々との密接な関係はランズバーガーの研究結果後年の1953年にも、A. ゲーツェ (Goetze) が研究した GAB.GAB.NI^{ki}=*Dus-dus-l^{ki}* の統治者であるフリバルに関連するウル第3王朝時代の行政経済文書でも確認されている (Goetze 1953a: 114-23)。

ランズバーガーは古バビロニア時代の地名表に記録されている同じく *Dus-dus-l^{ki}* と名がつづられている地名についても指摘している (Rawlinson 1891: 36; Civil 1974: 60)。ここでは目録の20列目に *Dus-dus-i^{ki}* とつづられた地名が *Elam^{ki}* (=エラム) とつづられた地名の直後に言及されている。さらに彼は同地名表の47列目に登録された地名は明白に認識する事ができないが *Tu-tú^{ki}* と地名のつづりを復元できると主張している。その結果、彼は古バビロニア時代、*Tu-tú^{ki}* と *Dus-dus-l^{ki}* とつづられた2つの別々のトゥトゥル市が存在しており、そして古期バビロニア時代の *Dus-dus-l^{ki}* はウル第3王朝時代の行政経済文書にでてくる、GAB.GAB.NI^{ki} = *Dus-dus-l^{ki}* と同一視できると主張し

た。他方ゲーツェはランズバーガーの古バビロニア時代とウル第3王朝時代の行政経済文書にでてくる GAB.GAB.NI^{ki}=*Dus-dus-l^{ki}* とを同一視する見解に関しては同意したものの、古バビロニア時代の地名表に登録されている *Tu-tú^{ki}* のつづりの復元については、同意に至っていない (Goetze 1953a: 121)。なぜなら *Tu-tú^{ki}* よりも *Tu-ba^{ki}* とつづり字を復元した方が、地名の順序が *Tu-ba^{ki}*, *Gú-dus-a^{ki}*, *Din-tir^{ki}*, *Ereš^{ki}* となり、これらの他の地名の所在地を考察した場合、文脈的に適していると主張した¹⁾。1974年にこの古バビロニア時代の地名表はM. シヴィル (Civil) の手により再度公表されたが、ここでは *Tu-tú^{ki}* とつづりが復元されている (Civil 1974: 60)。これらの見解を総合して考察してみると、まず古バビロニア時代に *Dus-dus-l^{ki}* と *Tu-tú^{ki}* が別々の存在なのかどうかは、*Tu-tú^{ki}* という町名のつづりの復元が不確かなため、残念ながら確定する事はできないという事になる。そして古バビロニア時代の地名表とウル第3王朝時代のフリバルという統治者に関する行政経済文書にでてきた地名 GAB.GAB.NI^{ki} = *Dus-dus-l^{ki}* はサルゴン王碑文のシュメール語で書かれた *Dus-dus-l^{ki}* と読みが一致するため、同じくサルゴン王碑文の古アッカド語で書かれた *Tu-tu-l^{ki}* も一緒に同一視できる可能性があるという事になる。この結果、論理的にサルゴン王碑文の *Tu-tu-l^{ki}* と *Dus-dus-l^{ki}* の所在地も同じくティグリス川上流域東部にあると推測する事が可能となりうる。

メソポタミア北西部バリフ川河口付近のテル・ビーア遺跡と同定できるトゥトゥル市

しかしサルゴン王碑文の中で *Tu-tu-l^{ki}* もしくは *Dus-dus-*

li^{ki} はユーフラテス川上、中流域に位置するであろう地名と羅列されており、またこれらの地域に位置するであろう地名が古バビロニア時代の地名表とウル第3王朝時代のフリバルという統治者に関する行政経済文書にでてくる地名 GAB.GAB.NI^{ki} = *Du_s-du_s-li^{ki}* といっしょに言及された例は1度も確認されていないという事実を考慮した場合、サルゴン王碑文の *Tu-tu-li^{ki}* (アッカド語) と *Du_s-du_s-li^{ki}* (シュメール語) の所在地をティグリス川上流域東部に位置させる事は不可能となる。さらに3つのウル第3王朝時代の文献に *Tu-tu-la^{ki}* と *Tu-tu-ul^{ki}* とつづられた地名の存在を GAB.GAB.NI^{ki} = *Du_s-du_s-li^{ki}* とは別に確認する事ができる (Edzard, et al. 1974: 201; Sollberger 1951: 121)。1つはダガンの名がつく固有名詞と、そしてエブラ市とマリ市と関連して言及されている。他の1つではマリ市とウルシュ (Uršū) 市と共に言及されている。古アッカド時代の行政経済文書である CT 50, 72 でも *Tu-tu-li^{ki}* と名がつづられたトゥトゥル市がマリ市と共に言及されており、そして古バビロニア時代のハンムラビ法典序文の中でも、*Tu-tu-ul^{ki}* と書かれた町名がマリ市とダガン神と関連して言及されている (Borger 1979: 6)。この結果、古バビロニア時代の地名表とウル第3王朝時代の経済文書にでてくる GAB.GAB.NI^{ki} = *Du_s-du_s-li^{ki}* はティグリス川上流域東部にその所在地を推測できるのにたいし、これらの *Tu-tu-la^{ki}*、*Tu-tu-ul^{ki}* そして *Tu-tu-li^{ki}* と書かれたトゥトゥル市は、ユーフラテス川上、中流域に位置するであろう町々と言及されているので、2つの地名はまったくの違うものであると言う事になる。また *Tu-tu-la^{ki}*、*Tu-tu-ul^{ki}* そして *Tu-tu-li^{ki}* と書かれたトゥトゥル市と共に言及されたメソポタミア北西域に位置するであろう地名の内、エブラ市とマリ市はサルゴン王碑文の中で、*Tu-tu-li^{ki}* と *Du_s-du_s-li^{ki}* と一緒に言及されており、またダガン神とこれらの町との密接な関係についてもサルゴン王碑文に見て取れる事から、サルゴン王碑文の *Tu-tu-li^{ki}* と *Du_s-du_s-li^{ki}* そして *Tu-tu-la^{ki}*、*Tu-tu-ul^{ki}* と *Tu-tu-li^{ki}* と書かれたトゥトゥル市は同一の地名であると認識する事ができる。

1974年にG. ドサン (Dossin) が最終的にユーフラテス川中流域上方に位置するトゥトゥル市の所在地同定を確立する事になるわけだが、それまでは上述のトゥトゥル市の地理所在地情報に加えて、他の2つのグループの文献史料がトゥトゥル市をユーフラテス川中流域上方に位置づけする有力な地理所在地情報として活用されていた。1つは古バビロニア時代の旅行記だが、これはバビロニアのラルサ (Larsa) 市から現在のシリアにあるエマル (Emar) 市まで半年をかけて旅行した際に順に立ち寄った町の名の一覧を記録している²⁾。停泊または宿泊した町々の距離をバビロニアのラルサ市から現在のシリアにあるエマル市まで最

短の直線距離で結んで計算した場合、1つひとつの町の距離は大体25から30キロメートルの距離間隔で位置していたと考えられる。またこの距離間隔は、歩きもしくは上流にボートで上がって行ったと仮定した場合、1日で動くことが可能な距離である。この旅行記で、トゥトゥル市の名は *Tu-ul-tul-ul* とつづられており、ハラン市からエマル市へ向かう途中に立ち寄った町として記録されている。

またゲーツェは、古バビロニア時代旅行記の *Tu-ul-tul-ul* とマリ出土の文献に言及される *Tu(-ut)-tu-ul* を、*Tu(-ut)-tu-ul* が古バビロニア時代旅行記の *Tu-ul-tul-ul* と隣接している町々と関連して手紙の中で記述されているのを理由に、これらのトゥトゥルを同一視できると主張している。またヤフドゥンリム (Yḥdun-Lim) 王碑文の中のトゥトゥル市の地理所在地情報にも注目している (Dossin 1953: 14; Frayne 1990: 606)。この王碑文によると、サマヌム (Samanum) 市、*Tu-tu-ul* と書かれたトゥトゥル市とアバットゥム (Abattum) 市の王達がヤムハド (Yamḥad) 市 (=アレppo) からの援軍と共にマリ市を攻撃したと記述されている。1番最初に言及されたサマヌム市の所在地については、現在のテルカ (Terqa) 市に位置すると考えられているので、マリ市の西に位置し、それほど遠くの所在地ではない。またヤムハド市 (=アレppo) は記述の中で1番最後に言及されており、そして援軍だけを送ったとあるので、他の2つの町よりもマリ市から1番西方の遠い場所に位置していると考えられる。その結果、ゲーツェは、これらのマリ市を攻撃した4つの都市は地理的な順に沿って言及されている可能性があり、ヤムハド市 (=アレppo) 東側で、現在のテルカ市よりも西のユーフラテス川中流域に *Tu-tu-ul* と書かれたトゥトゥル市とアバットゥム市の所在地を捜し求める事ができると主張した。後年 W. W. ハロー (Hallo) は、ゲーツェが先に主張した、古バビロニア時代旅行記の *Tu-ul-tul-ul* とマリ出土の手紙に言及される *Tu(-ut)-tu-ul* の同定論に関しては、アッカド語の *li* から *ul* への変化は言語学的にめったにないものであるため、これらの都市名の同定論に関しては、まだ議論の余地があると当初は慎重論を唱えたが、最終的にゲーツェの同定論を S. スミス (Smith) や H. レーヴィー (Lewy) 等と同様に支持するに至っている (Smith 1956: 37, note 5; Lewy 1958: 14)。

さてユーフラテス川中流域上方に位置するトゥトゥル市の正確な所在地について考察する場合、古バビロニア時代旅行記に記された2つの可能性のあるルートで、今現在所在地がはっきりしている、ハラン市とエマル市の位置を軸として考察する事により、想定する事ができる³⁾。まず1つの可能性のあるルートは、ハラン市からバリフ (Balih) 川を下り、そしてバリフ川とユーフラテス川合流地点から

上がるかたちでエマル市に向かう道だ。もう1つのルートとして考えられるのが、ハラン市から最短で直接ユーフラテス川に向かい、そしてユーフラテス川を下るかたちでエマル市に向かうルートだ。2つのバージョンの旅行記をそれぞれ公表したゲーツェとハローの2人は、旅は後述のルートを通ったと推測し、トゥトゥル市の所在地をエマル市よりもユーフラテス川上流域に位置づけられると仮定した。彼らの見解の理由として、トゥトゥル市に到着する2つ前の宿泊地として立ち寄ったザルパフ (Zalpaḥ) 市を古アッシリア時代のカッパドキア (Cappadocia) ロードと呼ばれた古アッシリア時代の商人達の交易路の拠点のひとつであるザルパ (Zalpa) 市と同定した事が挙げられるはずである (Goetze 1953b: 68; Goetze 1964: 116-7; Hallo 1964: 78)。彼等の見解によると、BIN VI 265 と TCL XXI 211, 50 の2つの文献史料に古アッシリア時代のザルパ市とバトゥナ (Batna) もしくはバドゥナ (Badna) 市の密接な関係が記されており、そしてバトゥナ/バドゥナ市は現在のウルファ (Urfa) 市とビレシク (Birecik) 市の中間に位置する現在のスルク (Sürüç) 市と同定できるので、古バビロニア時代旅行記のザルパフ市が古アッシリア時代のザルパ市と同定できるのであれば、ハラン市の西にザルパフ市を位置づける事が可能になり、そしてそれに応じるかたちで、トゥトゥル市をそこよりもさらに西に位置づける事がまた可能となると提案した。

しかし一連のこれらの見解に対して、M. フォークナー (Falkner) は異なる見解を示している (Falkner 1957-8: 9-10 & 33-34)。文献史料の ARM I 118 の中にザルパフ市はアフナ (Aḥuna) 市と共にハラン市の西に位置すると考えられているシュバット・シャマッシュ (Šubat-Šamaš) 市の近くに存在すると含意されていると主張している。またゲーツェが提案した一連の古アッシリア時代交易路の拠点となった町々の相対的な所在地に対しても、TCL XX 164 の文献に記録された旅費に関する記述を基に考察してみるとゲーツェの見解とは矛盾する結論に達するとフォークナーは主張している。ゲーツェは一連の古アッシリア時代交易路の拠点となった町々の相対的な位置関係は、エルフト (Eluḫut) 市-アブルム (Abrum) 市-ハガ (Ḥaga) 市-ザルパ市-ダダニア (Dadania) 市-ブルドゥム (Burudum) 市-シュイマラ (Šimala) 市-ハフウム (Ḥaḥḫum) 市-テメルキア (Temelkia) 市-カニシュ (Kaniš) 市になると提案していた。しかし TCL XX 164 の文献の旅費記録によれば、隊商は12シケル (shekel) 銀貨をエルフト市からハガ市までの旅費として使ったと記述されている。またザルパ市からカニシュ市までの旅費は4シケル銀貨だけ必要だったと記録されている。ゲーツェはエルフト市からハガ市までの距離は2駅で、ザルパ市か

らカニシュ市までの距離は6駅と主張しているので、単純計算してみると、隊商は2駅だけ移動するのに12シケルもの銀貨を使い、そしてその3倍の距離にあたる6駅旅するのに4シケル銀貨だけが必要である事になり、明らかに旅の距離と旅費との間に矛盾が生じている。またフォークナーは、BIN VI 180 の文献でザルパ市とダダニア市はヒッタイト首都であるハトゥシャ (Ḥattuša) 市付近に位置すると記述がある事についても指摘しており、ゲーツェの提案したザルパ市とザルパフ市の同定論を否定している。フォークナーの他に F. コルネリウス (Cornelius) も言語学的にザルパ市とザルパフ市を同定する事はできないし、またザルパ市の地理所在地情報を考察した場合、ザルパ市はハトゥシャ市付近に探し求められるべきであるとフォークナーよりも以前から主張していた (Cornelius 1955: 50)。こうしてこれらの見解を総括した結果、フォークナーは最終的に古アッシリア時代交易路拠点の町であるザルパ市とダダニア市はアッシリアの首都アッシュール (Aššur) 市から現在のトルコ中部に位置するカニッシュ市までの交易ルート間に位置しておらず、そして古バビロニア時代旅行記のトゥルトウル市はザルパフ市と共に、ハラン市西部に所在地を探し求める事もまたできないと結論づけた。

他方では、ユーフラテス川中流域上方に存在が認識されているトゥトゥル市の具体的な遺跡との所在同定も1958年に H. レーヴィー (Lewy) により行われており、彼女は現在のラッカ (Raqqah) 市から約25キロメートル上流にあるテル・タダヤイン (Tell Thadayain) 遺跡がトゥトゥル市であると同定した (Lewy 1958: 9-14)。レーヴィーはゲーツェによるトゥルトウル市のユーフラテス川中流域上方への相対的な位置づけ、また古バビロニア時代旅行記で言及されている、トゥトゥル市の近くの2つの地名であるハラヌム (Ḥarrānum) 市=ハラン市そしてアブクム・シャ・バリフ (Apqum ša Baliḫ) =バリフ川源泉の所在同定に関する見解には同意している。しかしレーヴィーは古バビロニア時代旅行記の帰路のルートはラッカ地域を経由したと推測しており、トゥトゥル市はこの地域に位置決定されると推測した。特にレーヴィーの見解で重要なポイントとなったのは、同じく古期バビロニア時代旅行記に出てくるアフナ市の所在同定だ。名前が類似している事を理由にアフナ市をギリシャ時代の町イフナイ (Ichnai) 市と同定した。このギリシャ時代の町はそこから北にあるニケフォリオン (Nikephorion) 市から一日の行進で到達する事ができ、またラッカ地域から北に36キロメートル離れた現在のフネズ (Hnēz) 市と所在同定できる事が古典学者によって確認されている。古期バビロニア時代旅行記の帰路についてのルートはアフナ市=フネズ市からアブクム・シャ・バリフ=バリフ川源泉を通過してハラヌム市=ハラ

ン市に到達したと記録されている。アフナ市＝フネズ市の前の停泊地はトゥトゥル市だから、バリフのデルタ地帯の沼地の近くにトゥトゥル市は位置決定されるべきと主張した。さらにレーヴィーはこのテル・タダヤイン遺跡との同定論をさらに支持するために、イスラム時代以前のカラックス (Charax) のイシドール (Isidore) 旅行記と上述の古バビロニア時代旅行記を比較して類似点を指摘した。カラックスのイシドール旅行記は、現在のラッカ市と同位置にあったニケフォリオン市にマンウオルハ・アウレス (Mannuorrha Aureth) と呼ばれた場所を通過して辿り着いたと説明している。このマンウオルハ・アウレスと呼ばれた場所は旅行記の中で、泉を所有していたと記述が残っている事から、レーヴィーはマンウオルハ・アウレスを古バビロニア時代旅行記のアブクム・シャ・バリフ＝バリフ川源泉と同定した。この結果、彼女はラッカ地域にある遺跡の中で、テルタダヤイン遺跡だけが十分に古く、そして大きな遺跡であり、トゥトゥルの様な重要な町の遺跡と同定できると結論づけている。

レーヴィーはさらに言語学的にもこの同定論を正当化する試みをしている。彼女の見解によると、テル・タダヤインのアラビア (Arabia) 語の名前の意味は“2つの胸の丘”という意味で、これはアッカド語の Tuttul もしくは Tultul と書かれたトゥトゥルの意味と一致すると主張した。なぜならアッカド語の *tulû* “女性の胸” という意味を示し、したがって Tultul は2重音節のかたちで、“2つの胸” という意味に理解できるからだ。この結果、彼女は Tuttul もしくは Tultul と書かれたトゥトゥルの名の意味はアラビア語のタダヤインと明白に同じ構成になっていると主張した。

ユーフラテス川中流域上方に位置するトゥトゥル市の正確な所在地同定は最終的に3枚のマリ出土の手紙の記述の公表により決定づけられ、フォークナーとレーヴィーの相対的な見解が正しかった事が解った。これは1952年ドサンが公表した2枚のマリ出土の手紙に書かれたトゥトゥル市の地理所在地情報と後年これらの2枚の手紙と共に公表したもう1枚のマリ出土の手紙にある地理所在地情報により明らかにされた (Dossin 1974: 25-34)。これらの3枚の手紙には、バリフ川から *Tu-ut-tu-ul*¹⁴ とつづられたトゥトゥル市の農地への水がザルパフ市でせき止められ、灌漑ができなくなったと記述されている。従ってザルパフ市は明白にトゥトゥル市よりもバリフ川上流に位置することになる。また同時にこれらの3枚の手紙の中で、トゥトゥル市のツェルダ (Şerda) 市とザルパフ (Zalpaḥ) 市に対する政治的優位性がほのめかされている。ドサンは他の文献史料の ARM 2, 137, 15 の記述にもまた注意を向け、この中でトゥトゥル市はマリ市とアレppo市の中間点に位置する

と示されていると主張している。これらの地理所在地域情報を基にトゥトゥル市の所在地を検討した結果、ドサンはトゥトゥル市はユーフラテス川とバリフ川の合流点のほとりに捜し求める事が可能で、またバリフ川河口地域で1番傑出したテルがトゥトゥル市と同定されるべきと推測した。テル・ビーア遺跡にはシュメールの初期幾何学文様土器も包括した豊富な土器片が散乱しており、また傑出した巨大集成する丘状遺跡であるという事、そして最後にこの遺跡だけがこの地域で壘壁遺構を持つという事実から、ドサンはテル・ビーア遺跡をトゥトゥル市と最終的に同定した。

1993年にこのドサンの同定論は最終的にドイツのテル・ビーア遺跡発掘調査隊の手でなされた発見により立証される。発掘チームは *Tu-ut-tu-ul*¹⁴ と書かれた地名を記録し、そしてダガン神の神殿について言及された多数の楔形文字史料を発見した (Krebernik 1993: 51-60; Krebernik 1994: 33-6; Krebernik 2001)。それらの文字史料の中のいくつかは行政経済文書で、これらは主に人事、食料配給の目録、そして色々な目的に使われた作物に関する陳述等に関して記載されている。これらの内容の文書の中に、トゥトゥル市の大きな作物貯蔵所に関する言及が頻繁になされている。

他の文書のグループでは、M.クレベルニク (Krebernik) がメッセンジャー文書と分類した、人々に配給する作物とビールの分配目録に関する文書で、これらは職務上の任務としてトゥトゥル市に向かう人々、およびトゥトゥル市から出て行く人々の活動を明確に示している。さらにこれらのメッセンジャー文書の中に、テル・ビーア遺跡がトゥトゥル市であると同定する事のできる、決定的な証拠が確認されている。それはこれらのメッセンジャー文書の受取人の名前がヤシュブ・イル (Yašūb-Il) と言及されており、この名前はマリ文書から知られるトゥトゥル市の統治者の名前と一致しているからである。

ヒッタイト出土のトゥトゥル市＝テル・ビーアに関する地理所在地情報

4枚のヒッタイト (Hittite) 語で書かれた文献の中に *Du-ud-du-ul* と *Du-ud-du-la* という地名が言及されている (del Monte and Tischler, 1978: 446; del Monte 1992: 176)。ボアズキョイ (Boğazköy) で発見されたこれらの4枚のうちの1枚の文献は *Du-ud-du-ul* と *Du-ud-du-la* のおおよその所在地としてユーフラテス川中流域上方を指し示していると推測できる。アフラム (Aḫlamu) と呼ばれた遊牧民が *Du-ud-du-ul* そして *Du-ud-du-la* とヒッタイト語でつづられた地名と関連して言及されている。明確に遊牧民の活動地域というものを定義する事は不可能であるが、アフラムと呼ばれた遊牧民は特にユーフラテス川上、中流域を活動

拠点にしていた事が一般的に知られている (Groneberg 1980: 5-6; Nashef 1982: 5-6; del Monte and Tischler 1978: 2; Mar 地 2001: 6)。この結果 *Du-ud-du-ul* そして *Du-ud-du-la* とヒッタイト語でつづられた地名は、ウル第3王朝時代の経済文書と古バビロニア時代の地名表に言及されている GAB.GAB.NI^{ki} = *Dus-dus-li^{ki}* とは切り離して扱わなければならないはずである。しかしこの *Du-ud-du-ul* と *Du-ud-du-la* の地理所在地情報は上述したユーフラテス川中流域上方にトゥトゥル市の所在地を示すその他の文献史料の地理所在地情報と一致するので、*Du-ud-du-ul* そして *Du-ud-du-la* とヒッタイト語でつづられた地名を、シュメール語で書かれたサルゴン王の王碑文の *Dus-dus-li^{ki}* と同定し、ユーフラテス川中流域上方に位置づけする事ができるはずである。

エブラ出土のトゥトゥル市=テル・ビーアに関する地理所在地情報

トゥトゥル市は、初期王朝もしくはアッカド王朝時代と同時代と考えられているエブラ文書の中でも頻繁に言及されている。エブラ文書 75.2233 と 75.2465 の2枚の文献は、*Du-du-lu^{ki}* と名がつづられたトゥトゥル市の位置に関して、他の文献証拠と同じようにユーフラテス川中流域上方を指し示している (Archi 1984: 231-2; Archi 1990: 197-207; Michalowski 1985: 297, note 34; Bonechi 1993: 117-9)。A. アルキ (Archi) は、2枚の文献でナガル (Nagar) 市の王がトゥトゥル市で贈り物を受け取り、そしてエブラ市の行政管理の下、贈り物をトゥトゥル市の BAD と書かれた神に捧げたと記述されていると主張している。現時点までの証拠はテル・ブラク (Tell Brak) の古代都市名はナガル (Nagar) もしくは後代のナワル (Nawar) であると強く示唆しており、例えばテル・ブラクの3千年期の地層から *Na-gàr^{ki}* と刻まれた土器容器の封印泥が発掘調査で見つけられている。さらに1937年~38年の間に行われた発掘調査でも、ナガル国の息子、タルプシュアティリ (Talpuš-atili) という人物名が記載された印章跡が発見されている。タイドゥ (Ta'idu) 州のナワル市の葦に関して記述された文献もミタンニ (Mitanni) 時代の宮殿跡から発見されている (Schwartz 1997: 355-6; Eidem: 1998: 75-7)。この結果、ナガル市の所在地はテル・ブラク近辺のハブール (Ḫabur) 地域に位置していると考えられ、そしてエブラ市 (= Tell Mardih) とナガル/ナワル市 (= Tell Brak) の所在地を念頭においてこれら2つのエブラから発見されたトゥトゥル市の地理所在地情報を考察してみると、ユーフラテス川中流域上方に位置するトゥトゥル市=テル・ビーアと同定する事ができ、またシュメール語で書かれたサルゴン王の王碑文の *Dus-dus-li^{ki}* と同定できる事になる。アルキはまたこのエブラ文書の *Du-du-lu^{ki}* とサルゴン王の碑文で言

及されているトゥトゥル市と同一視する事ができるのであればエブラ文書の *Du-du-lu^{ki}* と一緒に言及される BAD と書かれた神はダガン神と同定する事も可能ではないかと提案している⁴⁾。

サルゴン王碑文におけるトゥトゥル市の所在同定における意味ともう一つのトゥトゥル市

これら一連の研究結果から明白に解るように、マリ市北西のバリフ川とユーフラテス川の合流地点に位置しているテル・ビーア遺跡はトゥトゥル市と同定された。ドイツ発掘隊がこのテル・ビーア遺跡とトゥトゥル市の同定論を明らかにしてから、それに関する学者間の見解の相違は見受けられないので、今現在この同定論の確実性は揺るぎのないものとなっている。そしてこのトゥトゥル市はウル第3王朝時代の行政経済文書と古期バビロニア時代地名表に言及されている GAB.GAB.NI^{ki} = *Dus-dus-li^{ki}* と書かれたトゥトゥル市とは違う町であるという事だ。しかしトゥトゥル市と所在同定されたテル・ビーア遺跡からはダガン神に関する記述のある文献も発見されている事からも明確な様に、サルゴン王碑文の *Tu-tu-li^{ki}* と *Dus-dus-li^{ki}* と名がつづられたトゥトゥル市と同定されるべきである。またエブラ文書の *Du-du-lu^{ki}* と名がつづられたトゥトゥル市および、ヒッタイト語で *Du-ud-du-ul* とつづられたトゥトゥル市の地理所在地情報を考察した場合、これらのトゥトゥルもテル・ビーア遺跡のトゥトゥル市と同定できるだろう。

さてサルゴン王の歴史的偉業は同時代史料の王碑文および年名が記された行政経済文書に記録されているとおり、サルゴン王はメソポタミアの歴史史上始めて北のアッカド地方と南のシュメール地方の有力諸都市を支配しそして統一、さらにはバビロニア東のエラム地方そして北の都市国家シムルム (Simrum) まで軍事遠征を行い、これらの遠方地域をも征服した偉大な王と位置づける事が出来る (前田 1984: 553-63; Frayne 1993: 8)。しかしサルゴン王が軍事的、また政治的に確立したメソポタミア北西領土の範囲を考察、定義してみると、意見の一致を見る事ができない。

上述した様にシュメール語と古アッカド語で書かれた、2言語使用のサルゴン王の碑文の中に、サルゴン王がトゥトゥルでダガン神に祈りを捧げ、その結果ダガン神は上方の国土、即ちマリ、ヤルムティ、エブラ、杉の森、そして銀の山々をサルゴン王に与えたという記述がある (Frayne 1993: E.2.1.1.11-12)。この記述のある王碑文は今から約90年ほど前に始めて A. ポエベル (Poebel) の手によって公表されたのだが、それ以来はたしてこの碑文の記述の意味する所は、これらの都市国家および地域をサルゴン王が軍事的に征服し、また政治的支配下においたと解

積できるのか、また否なのかどうか長い間議論の的となっている (Poebel 1914: 177-8 & 187; pl. XX no. 34)。これらの地名のうち、サルゴン王のマリ市への軍事遠征および政治的支配に関してはサルゴン王の手で行われたと意見の一致を見る事ができる。なぜならマリとエラムのサルゴン王への忠誠を示唆する記録がサルゴン王の他の2つの王碑文に見る事ができるし、また上述した様に、エラムはサルゴン王に撃破されている事が確認できるため、同様にニップール出土の行政経済文書の年名“マリを破った年”をサルゴン王に帰する事が可能であると推測できるからである (Westenholz 1975: 115; 前田 1984: 560; Frayne 1993: 8, E2.1.1.1 & 2)。また考古学的にもマリで確認された宮殿の破壊跡を示す地層もサルゴン王に起因する事ができるため、メソポタミア北西域のマリ市まではサルゴン王の軍事的そして政治的支配下にあったと考えられる (Lebeau 1985: 135; Durand 1985: 152-9; Charpin 1989: 96; Frayne 1993: 8; Westenholz 1998: 8)。

しかしマリよりも北西の地域へのサルゴン王の軍事的また政治的関与に関しては、これまでに様々な見解が示されている。特に近年のイタリア発掘隊の功績によりこれらの地名の内のエブラ市が発見され、アッカド王朝もしくはそれよりも以前の初期王朝時代と同年代と考えられるテル・マルディフ (Tell Mardīḫ) IIB1の破壊層が確認されている。この結果、初期王朝時代のシュメール都市国家の王か、サルゴン王、もしくはサルゴン王の孫にあたるナラムシン (Naram-Sin) 王の誰かにこの破壊層が起因するのか、またはこれらの王以外が原因ではないかと今現在も議論的となっている (Astour 2002: 57-76)。

1914年に2つのこれらのサルゴン王の王碑文を始めて公表したポエベルは同時にトゥトゥル以外の地名のマリ、ヤルムティ、エブラ、杉の森、そして銀の山々の所在地を試験的に同定し、その結果を基にサルゴン王が東から北西へ向かった軍事旅程順にこれらの地名が羅列されているのではないかという仮説も主張した (Poebel 1914: 222-28)。その後1924年にランズバーガーがさらにこれらのサルゴン王碑文にあるトゥトゥルの所在地に関しても言及し、紀元前7世紀の新アッシリア時代末の語彙集 (Har=gud) に [Tu]-ul-tu-ul^{li} と書かれた都市名が I^{ul}-d[a] という地名と同定されており、またこの地名は今日のマリ市東側のユーフラテス川中流域下方に位置するイラクのヒート (Hit) 市と同定できると指摘した (Schroeder 1920: No. 183; Landsberger 1924: 233; Civil 1974: 35; Postgate 1976-80: 33)。そしてランズバーガーもポエベルと同様にサルゴン王碑文に言及される北西域の地名はトゥトゥル市、即ちヒート市を先頭にそこから北西方向に向かってサルゴン王が軍事遠征した旅程順に羅列されていると同じく主張した

(Landsberger 1924: 233-369)。90年たった今現在においてもこの見解はいまだに支持される傾向にあり、このポエベルの見解を基礎にした最も新しい提案は M. C. アスター (Astour) が2002年に主張している (Astour 2002: 68-73)。この結果、この新アッシリア時代末の語彙集 (Har=gud) の [Tu]-ul-tu-ul^{li} を2言語使用のサルゴン王碑文の Tu-tu-lī^{li} と Du_s-du_s-lī^{li} と書かれたトゥトゥルと同一視してさらに、現在のヒート市に所在地を理論的には定める事が可能となる。しかしながらこの相関関係は適切でないと考えられる。マリ出土の古バビロニア時代の4枚の文献にイダという町の記述が確認されている。その一方、Tu-ut-tu-ul^{li} もしくは Tu-tu-ul^{li} と名がつづられたトゥトゥル市と同じくマリから発見された古バビロニア時代の文献群にも確認する事ができる。すなわち同時代の同じ町で1つの地名を2つの違った名でわざわざ記しているという矛盾を確認できる事となる (Groneberg 1980: 104-5)。

他方では1979年にクベル (Kupper) が3枚のマリ出土の文献のなかに、マリの東側、すなわち現在のイラクのヒート市の近くに Tu-ut-tu-ul^{li} もしくは Tu-tu-ul^{li} とつづられたトゥトゥル市が位置すると示唆されていると主張した (Biro, Kupper & Rouault 1979: 36)。しかし後年1987年に W. マイヤー (Mayer) はマリから発見され、そして Tu-ut-tu-ul^{li} もしくは Tu-tu-ul^{li} とつづられたトゥトゥル市の名が記載されている文献群だけを基にして古バビロニア時代のトゥトゥル市の町の歴史を再現する試みを行っている。その中で、彼は現在のヒート市 (=イダ市) と古期バビロニア時代のマリ市から発見された文献群に記述されたトゥトゥル市を同一視する事は不可能であるという結論に達している (Mayer 1987: 121-60, 1989: 271-6)。なぜならマリから出土した Tu-ut-tu-ul^{li} もしくは Tu-tu-ul^{li} とつづられたトゥトゥル市の所在地に関して何かしら言及しているすべての文献証拠の中にトゥトゥル市がマリよりも東に位置していると指し示す記述が1つも見つからない事を主要な理由として挙げている。1989年 D. シャルパン (Charpin) もマイヤーと同様の結論に達しており、マリから出土した Tu-ut-tu-ul^{li} もしくは Tu-tu-ul^{li} とつづられたトゥトゥル市の所在地をヒート市 (=イダ市) に同定する事はできないと主張した (Charpin 1989: no. 16)。マイヤーとシャルパンが結論づけたとおり、クベルが指摘した3枚のマリ出土の文献に言及されるトゥトゥル市の地理所在地情報を考察した場合、これらの文献に言及されるトゥトゥル市をマリ西方に位置させてもなんら問題のない地理所在地情報である事がわかる。なぜならこれら3枚の地理所在地情報にトゥトゥル市と関連して言及される他の町々の位置関係をもとにトゥトゥル市の所在地を考察した場合、むしろマリの東側ではなくマリ周辺域どこにでもトゥトゥ

ル市を所在同定する事が可能であるからである (Dossin 1946: 56-9, 1951a: 32-5, 1951b: 48-51)。さらにこれらのうちの1つの文献の中でトゥトゥル市とイダ市がそれぞれ別の存在としていっしょに言及されている (Dossin 1951a: 32-5)。この事実からもイダ市とトゥトゥル市を同定する事は不可能である。

さらにイダ市とダガン神の相互の密接な係わり合いを指し示すなんらかの文献証拠というものもこれまでに報告された事は確認されていない (Groneberg 1980: 104-5; Nashef 1982: 135-6; Zadok 1985: 184)。それゆえ、紀元前7世紀の新アッシリア時代末語彙集 (Har=gud) での、[Tu]-ul-tu-ul^{ki} と Iⁿⁱ-d[a]を同一視している記録に関しては、正確な地名の情報が包括されていないと推測されるべきではなかろうかと考えられる。

しかしマイヤーとシャルパンの見解に対し、アスターは同意しておらず、新アッシリア時代末の語彙集 (Har=gud) にある[Tu]-ul-tu-ul^{ki} と Iⁿⁱ-d[a]の同定記録は正当なものであり、マリ市東側のユーフラテス川中流域下方に位置する今日のイラクのヒート市をサルゴン王碑文に Tu-tu-li^{ki} と Dus-dus-li^{ki} と名がつづられたトゥトゥル市と同定されるべきであると主張する。またアスターはユーフラテス川中流域下方に存在するトゥトゥル市を示す幾つかの文献証拠も示した。しかしアスターのこの見解は、純粹にサルゴン王碑文にあるトゥトゥル市がどこに位置するのかという観点から到達したものではなく、サルゴン王碑文に言及されるメソポタミア北西域に存在する地名はサルゴン王が軍事遠征を行い、訪れた旅程順に羅列されているという仮説を大前提とした上での結論である。そのため上述で指摘したダガン神とサルゴン王そしてダガン神とトゥトゥル市およびテル・ビーアとの密接な関係を無視している。そのため提示された一連のユーフラテス川中流域下方に存在するトゥトゥル市を示す文献証拠もすべて状況証拠的なもので、明白にまた直接ユーフラテス川中流域下方に位置する第3のトゥトゥル市を示す地理所在地情報はアスターが示した文献証拠に見出す事はできない。その結果、彼の示した文献証拠はティグリス川上流域東部に位置すると推測されるトゥトゥル市とテル・ビーアと同定されたトゥトゥル市の存在を示す状況証拠としても適用可能になってしまうものである⁵⁾。それ故に上述の一連の研究結果から明白な様にサルゴン王碑文に言及されるトゥトゥル市はテル・ビーア遺跡と同定されたトゥトゥル市と同定される事が一番自然の結論である。

この結論をもってサルゴン王のマリよりも北西域への政治的そして軍事的な関与の可能性を全面的に否定する事はできないが、サルゴン王碑文の北西域の地名に関する記述はサルゴン王がアッカド地域から北西遠征を行った旅程順

に記されているという説の可能性を低くする結果となる。そしてサルゴン王の北西支配領域内へのトゥトゥル市の帰属性はマリ市よりも北西に位置するため疑問視される事となり、またサルゴン王の政治的そして軍事的な北西領域範囲の定義を、今現在利用できるサルゴン王とシュメール・アッカドの北西地域との関連性を示す確固たる文献と考古証拠を基に考察すると、現在のマリ市の位置がサルゴン王が支配した領土とその北西域を隔てる境界であると結論づける事ができるであろう。

本稿は筆者が2005年4月に、英国リヴァプール大学大学院考古学部で正式に受理された博士論文第4章を日本語に翻訳し、また査読者の方々からいただいた大変有益なアドバイスを考慮して、修正を加えたものである。

註

- 1) ティグリス川東部のトゥトゥル市は、古バビロニア時代の1枚の手紙の中にも確認できると思われる。ここで *Dus-dus-li^{ki}* と名がつづられた地名がでてくる。マイヤーは当初このトゥトゥルはマリ西方に位置すると推測していた。しかしこの都市名の位置を決定づける有益な地理所在地情報は手紙の中で言及されていない。さらにこの手紙はディヤラ (Diyala) 地域で発見されているので、クレベルニクが指摘するように、この地名は GAB.GAB.NI^{ki}=*Dus-dus-li^{ki}* と同定できると思われる (Mayer 1987: 187; Krebernik 2001: 3)。またグロネベルグはこの手紙について UCP 9/5, no. 29 で公表されたとは指摘しているが、それは間違いで、正確には UCP 9/4 になる (Groneberg 1980: 242)。
- 2) 第1のバージョンの旅行記は1953年にゲーツェにより公表され、その11年後にハローの手により他の副本の旅行記が公表され、最初に公表されたバージョンの欠落部を大幅に補足する事が可能になった (Goetze 1953b: 51-72; Hallo 1964: 57-88)。ゲーツェはこの副本についても見解を述べている (Goetze 1964: 114-9)。
- 3) ゲーツェとハローが旅行記を公表した際、エマル市の所在地はしっかりと確立されていなかったが、当時彼等が推測したエマル市とメスケネ (Meskene) との同定論は後年証明されている。
- 4) 明白な根拠については述べていないが、しかしアルキは逆説を唱えており、BAD がダガン神と同定されるのであれば、イダがエブラ文書とサルゴン王碑文のトゥトゥル市として最もふさわしいと主張している。しかし上述で言及した様に、ユーフラテス川中流域上方に位置するトゥトゥル市とダガン神の密接な関係は明白に確認されており、アルキの主張は適切ではない (Archi 1984: 232)。G. ペティナート (Pettinato) も根拠については述べていないが、アルキ同様、エブラ文書のトゥトゥル市は現在のヒート市、すなわちイダであると主張している (Pettinato 1986: 296; Pettinato 1991: 155)。下記の章で詳しく述べるが、両者の意見はサルゴン王碑文に記される北西域の地名はサルゴン王が北西遠征をした軍事旅程順に羅列されていると仮定した上での見解だと思われる。
- 5) アスターはマリ東部に位置するトゥトゥル市の存在を示す5つの文献証拠を具体的に挙げている (Astour 2002: 69)。それらのうちの1つは、上述の註1で言及した UCP 9/4 no. 29 である。そのためここで言及されるトゥトゥルはティグリス川に存在するであろうトゥトゥル、すなわち GAB.GAB.NI^{ki}=*Du-du-li^{ki}* と同定されるのが妥当である。

イラクのパセトゥッキ (Bassetki) で見つかったナラムシン王の碑文の中でトゥトゥル市のダガン神がメソポタミア南部に位置する町々とそれらの守護神の名と共に言及されている (Frayne 1993: E.2.1.4.10)。アスターはこの記述はメソポタミア南部に存在する第3のトゥトゥル市を示す証拠であると主張した。しかし、この碑文の記述は町々の所在地を焦点に書かれた物ではなく、祈願された神々が焦点となった記述であるから、この碑文の記述をもとにメソポタミア南部に第3のトゥトゥル市の存在を推測する事は適切ではなく、ダガン神とトゥトゥル市 (= テル・ビーア) の密接な係わり合いは明白であるのだから、このトゥトゥル市をテル・ビーアと同定したほうがむしろ自然である。

アスターは MSL 11 の中の新アッシリア時代末の語彙集 (Har=gud) 以外の他の3つの地名表の中にも *Tu-ul-tu-ul^{hi}* と *Tu-tu^{hi}* とつづられたトゥトゥル市を確認する事ができると指摘した (Civil 1974: 37, 60 and 141)。アスターはこれら3つの地名表に記述される地名はバビロニア (シュメール・アッカド) 地方とティグリス川沿いに位置する諸都市であると主張、その結果これらの地名表にあるトゥトゥル市をトゥトゥル市と同定されたテル・ビーアに所在地を求められる事はできないという見解も示した。しかしこれらの地名表の大半の地名の正確な所在地は未だ不明であり、本当にこれらの地名表の地名がバビロニア (シュメール・アッカド) 地方とティグリス川沿いの諸都市だけで構成されているという確証を得られる事はできない。またこれらの3つの内の1つの地名表は上述した古バビロニア時代の地名表であり、*Tu-tu^{hi}* と復元された地名は *Tu-ba^{hi}* とつづり字が復元できる可能性もあるものなのでトゥトゥル市の所在地を考察するうえでの確固たる証拠にはならない。またもしアスターが主張するように他の2つの地名表に記述される地名はバビロニア (シュメール・アッカド) 地方とティグリス川沿いに位置する町々だけで構成されてるのであれば、これら2つの地名表のトゥトゥル市をティグリス川東部のトゥトゥル市と同定する事も理論的には可能となってしまう、大変間接的で状況証拠的な文献証拠としてしか、これら2つの地名表を取り扱う事ができない。またハンムラビ法典序文の中で、*Tu-tu-ul^{hi}* と書かれた町名がマリ市とダガン神と共に記述されている事についてはすでに上述した。ダガン神と密接な関係が示されている事から明白な様に、このトゥトゥル市はテル・ビーアのトゥトゥル市と同定されるのが一番自然である。このハンムラビ法典序文の中に他の町名がたくさん出てくるのだが、トゥトゥルとマリ以外はすべてバビロニア (シュメール・アッカド) 地方とティグリス川沿いに位置する町々である。この結果アスターが主張する様に3つの地名表に記述される地名のほとんどが本当にバビロニア (シュメール・アッカド) 地方とティグリス川沿いに位置する諸都市だとしても、それだけを理由にこれらの3つの地名表にあるトゥトゥル市をテル・ビーアと同定されたトゥトゥル市以外に求めるという結論に達する事はできないという事になる。

参考文献

Archì, A. 1984 The Personal Names in the Individual Cities. In P. Fronzaroli (ed.), *Quaderni di Semitistica 13: Studies on the Language of Ebla*, 225-51. Firenze, Istituto di Linguistica e di Lingue Orientali Università di Firenze.

Archì, A. 1990 Tuttul-sur-Balīḥ à l'âge d'Ebla. In Ö. Tunca, (éd.), *De la Babylonie à la Syrie, en passant par Mari, Mélanges offerts à monsieur*

J.-R. Kupper à l'occasion de son 70e anniversaire, 197-207. Liège, Université du Liège.

Astour, M. C. A Reconstruction of the History of Ebla (Part 2). In C. H. Gordon & G. A. Rendsburg, (ed.), *Eblaïtica 4: Essays on the Ebla Archives and Eblaïte Language*, 57-195. Winona Lake, Indiana, Eisenbrauns.

Biro, M., Kupper, J. R. & O. Rouault. 1979 *Archives Royales de Mari XVI/I: Répertoire Analytique*. Paris, Librairie Orientaliste Paul Geuthner.

Bonechi, M. 1993 *Répertoire Géographique des Textes Cunéiformes 12/1: I nomi geografici dei testi di Ebla*. Wiesbaden, Dr. Ludwig Reichert Verlag.

Borger, V. R. 1979 *Analecta Orientalia 54: Babylonisch-Assyrische Lesestücke*, Heft 1. Rome, Pontificium Institutum Biblicum.

Charpin, D. 1989 Tuttul et It d'après les archives de Mari. *Nouvelles Assyriologiques Brèves et Utilitaires* 1989, Nr. 16.

Civil, M. (ed.). 1974 *Materials for the Sumerian Lexicon 11: The Series HAR-ra = ḫubullu*. Rome, Pontificium Institutum Biblicum.

Cornelius, F. 1955 Hethitische Reisewege. *Revue hittite et asianique* 13: 49-62.

Dossin, G. 1946 *Archives Royales de Mari I: Correspondance de Šamši-Addu*. Paris, Librairie Orientaliste Paul Geuthner.

Dossin, G. 1951a *Archives Royales de Mari IV: Correspondance de Šamši-Addu*. Paris, Librairie Orientaliste Paul Geuthner.

Dossin, G. 1951b *Archives Royales de Mari V: Correspondance de Iasmah-addu*. Paris, Librairie Orientaliste Paul Geuthner.

Dossin, G. 1953 L'inscription de fondation de Iahdun-Lim, roi de Mari. *Syria* 32: 1-28.

Dossin, G. 1974 Le site de Tuttul-sur-Balīḥ. *Revue d'Assyriologie et d'archéologie orientale* 68: 25-34.

Durand, J. M. 1985 La Situation Historique des Sakkanakku: Nouvelle Approche. *MARI: Annales de Recherches Interdisciplinaires* 4: 147-72.

Edzard, D. O. et al.. 1974 *Répertoire Géographique des Textes Cunéiformes 2: Die Orts- und Gewässernamen der Zeit der 3. Dynastie von Ur*. Wiesbaden, Dr. Ludwig Reichert Verlag.

Eidem, J. 1998 Nagar. *Reallexikon der Assyriologie* 9: 75-7.

Falkner, M. 1957-8 Studien zur Geographie des alten Mesopotamien. *Archiv für Orientforschung* 18: 1-37.

Frayne, D. R. 1990 *The Royal Inscriptions of Mesopotamia Early Periods 4: Old Babylonian Period (2003-1595 BC)*. Toronto, The University of Toronto Press.

Frayne, D. R. 1993 *The Royal Inscriptions of Mesopotamia Early Periods 2: Sargonic and Gutian Periods (2334-2113 BC)*. Toronto, The University of Toronto Press.

Gelb, I. J. 1938 Studies in the Topography of Western Asia. *American Journal of Semitic Languages and Literatures* 55: 66-85.

Goetze, A. 1953a Ḫulibar of Duddul. *Journal of Near Eastern Studies* 12: 114-23.

Goetze, A. 1953b An Old Babylonian Itinerary. *Journal of Cuneiform Studies* 7: 51-72.

Goetze, A. 1964 Remarks on the Old Babylonian Itinerary. *Journal of Cuneiform Studies* 18: 114-9.

Groneberg, B. 1980 *Répertoire Géographique des Textes Cunéiformes 3: Die Orts- und Gewässernamen der altbabylonischen Zeit*. Wiesbaden, Dr. Ludwig Reichert Verlag.

Hallo, W.W. 1964 The road to Emar. *Journal of Cuneiform Studies* 18: 57-88.

- Krebernik, M. 1993 Schriftfunde aus Tell Bi'a 1992. *Mitteilungen der deutschen Orient-Gesellschaft zu Berlin* 125: 51-60.
- Krebernik, M. 1994 Tall Bi'a 1993: Die Schriftfunde. *Mitteilungen der deutschen Orient-Gesellschaft zu Berlin* 126: 33-6.
- Krebernik, M. 2001 *Tall Bi'a/Tuttul-II: Die Altorientalischen Schriftfunde*. Saarbrücken, Saarbrücken Druckerei und Verlag.
- Landsberger, B. 1924 Über die Völker Vorderasiens im dritten Jahrtausend. *Zeitschrift für Assyriologie* 35: 213-38.
- Lebeau, M. 1985 Rapport préliminaire sur la céramique du bronze ancien IVA découverte au 'palais présargonique 1' de Mari. *MARI: Annales de Recherches Interdisciplinaires* 4: 127-36.
- Lewy, H. 1958 Šubat-Šamaš and Tuttul. *Orientalia Nova Series* 27: 1-18.
- Marín, J. A. B. 2001 *Répertoire Géographique des Textes Cunéiformes 12/2: Die Orts- und Gewässernamen der Texte aus Syrien im 2. Jt. v. Chr.*. Wiesbaden, Dr. Ludwig Reichert Verlag.
- Mayer, W. 1987 Grundzüge der Geschichte der Stadt Tuttul im 2. Jt. v. Chr.. *Ugarit-Forschungen* 19: 121-60.
- Mayer, W. 1989 Ergänzungen zur Geschichte der Stadt Tuttul I. *Ugarit-Forschungen* 21: 271-6.
- Michalowski, P. 1985 Third Millennium Contacts: Observations on the Relationships Between Mari and Ebla. *Journal of the American Oriental Society* 105: 293-302.
- del Monte, G. F. and Tischler, J. 1978 *Répertoire Géographique des Textes Cunéiformes 6: Die Orts- und Gewässernamen der hethitischen Texte*. Wiesbaden, Dr. Ludwig Reichert Verlag.
- del Monte, G. F. 1992 *Répertoire Géographique des Textes Cunéiformes 6/2: Die Orts- und Gewässernamen der hethitischen Texte Supplement*. Wiesbaden, Dr. Ludwig Reichert Verlag.
- Nashef, K. 1982 *Répertoire Géographique des Textes Cunéiformes 5: Die Orts- und Gewässernamen der mittelbabylonischen und mittelassyrischen Zeit*. Wiesbaden, Dr. Ludwig Reichert Verlag.
- Pettinato, G. 1986 *Ebla. Nuovi orizzonti della storia*. Milano, Rusconi.
- Pettinato, G. 1991 *Ebla, A New Look at History* translated by C.F. Richardson. London & Baltimore, The Johns Hopkins University Press.
- Poebel A. 1914 *University of Pennsylvania, the University Museum Publications of the Babylonian Section 4/1: Historical Texts*, Philadelphia, The University of Pennsylvania Press.
- Postgate, J. N. 1976-80 *Īdu. Reallexikon der Assyriologie* 5: 33.
- Rawlinson, H. C. 1891 *The Cuneiform Inscriptions of Western Asia IV*. London, The British Museum Press.
- Schroeder, O. 1920 *Keilschrifttexte aus Assur verschiedenen Inhalts*. Zeller, Osnabrück.
- Schwartz, G. M. 1997 Brak, Tell. In E. M. Meyers, (ed.), *The Oxford Encyclopedia of Archaeology in the Near East*, vol. 1, 355-6. New York & Oxford, Oxford University Press.
- Smith, S. 1956 Ursu and Ḫaššaum. *Anatolian Studies* 6: 35-43.
- Sollberger, E. 1951 Byblos sous les rois d' Ur. *Archiv für Orientforschung* 19: 120-2.
- Zadok, R. 1985 *Répertoire Géographique des Textes Cunéiformes 8: Geographical Names According to New- and Late-Babylonian Texts*. Wiesbaden, Dr. Ludwig Reichert Verlag.
- Westenholz, A. 1975 *Old Sumerian and Old Akkadian Texts in the Philadelphia chiefly from Nippur I*, Udena, Malibu.
- Westenholz, J.G. 1998 Relations between Mesopotamia and Anatolia in the Age of the Sargonic Kings. XXXIVème RAI: XXXIV. *Uluslararası Assirioloji Kongresi*, 5-22. Ankara, Türk Tarih Kurumu Basımevi.
- 前田 徹 1984 「アッカド王朝時代の軍事遠征」 「日本オリエント学会創立三十周年記念オリエント学論集」 558-63 頁 刀水書房。
- ARM: *Archives Royales de Mari*.
- BIN: *Babylonian Inscriptions in the Collection of J.B. Nies*.
- CT: *Cuneiform Texts from Babylonian Tablets in the British Museum*.
- MSL: *Materials for the Sumerian Lexicon*.
- RTC: *Recueil de tablettes chaldéennes*.
- TCL: *Textes cunéiformes. Musée du Louvre*.
- UCP: *University of California Publications in Semitic Philology*.

川上 直彦

国士舘大学イラク古代文化研究所

Naohiko KAWAKAMI

The Institute for Cultural Studies of Ancient Iraq, Kokushikan University